事例２　突然教室の窓から渡り廊下に飛び移ったりするＢ男（小学４年生）

欠席等の様子

１年　５日　集団登校ほとんどできず、車で送ってもらう。遅刻が多い。

２年　10日　始業に間に合わないことが多い。

３年　４日　週に数回遅刻した。

４年　15日（１学期）担任の叱責をきっかけとして欠席が続く。

13日（２学期11月末現在）友達の注意をきっかけとして欠席が続く。

学習の様子

〔算数〕(１年)20までの加算はできる。
小２以降学習意欲が低下し、授業中他の本を見たり、落書きして過ごす。

〔国語〕(１年)ひらがながようやく読めた。
(３年)音読はできるがたどり読みで、視写を嫌がる。
(４年)乱雑な文字が多い。語のニュアンスが理解しにくい。語の使い方が不的確である。

〔その他〕(２年)発達検査は境界線レベル。
(４年)１～２年の学力である。

性格や行動の様子・エピソードなど

○　生後３ヶ月で保育園に入園した。母親はしつけをほとんどしなかった。
○　幼児期から、父親と兄にたびたび暴力を振るわれた。
○　(１年)整理整頓が出来ず、消しゴムや鉛筆をいつも噛んでいた。
○　(２年)トラブルで興奮すると、落書きをしたり、物を投げたり２階から落としたりした。
○　(４年)教室の窓から渡り廊下へ飛び移るなど、危険な行為がしばしばある。
○　両親の帰宅が遅く不規則な生活で、子どもだけで深夜まで過ごすことが多い。
○　注意を受けても、指示・指導が入らず、暴言を吐いてけん制の態度をとる。
○　授業中、他の児童を巻き込んで校舎を徘徊する。
○　学校と児童相談所との連携の中で「ＡＤＨＤ[※2]を含むＬＤが推測される」という所見を得る。

児童の理解

ＡＤＨＤを含むＬＤが疑われる。幼児期の基本的生活習慣形成も不十分で、集団適応が困難になっている。登校しぶりは、学習の遅れ、未熟な社会性、人間関係の希薄さなどによるものと考えられる。また、父親や兄の暴力的なかかわりを背景として、注意や叱責に対して過剰に反応し、暴言や暴力がしばしば見られることにも留意する必要がある。

保護者は、Ｂ男の行動を「ＡＤＨＤやＬＤかもしれないから」ではなく、学校の指導の不十分さ等によるものと考えており、見解の不一致がその行動を助長している。

援助・指導の方針

１　自己存在感の確立を促すための具体的な活動を設定する。
（成就経験が少ないので、達成感をもてるよう工夫する。）

２　受容的態度を示しながら、集団生活を送れるように、ルールを守ることを指導する。
（トラブル時は落ち着くのを待ち、気持ちを受け止めた上で、厳しさを示す。）

３　学習の個別指導及び家庭との連携により、信頼関係の修復と、指導の一致を図る。

援助・指導例と経過	主な担当者　教育相談部員、担任
○１回目の不登校 ４年　６月	・学習用具の不備、授業中の手遊び、無断下校等について若干厳しく注意された。→「暴力を振るわれた」と言って帰宅し、翌日から欠席が続く。 ・担任外教員が、たびたび家庭訪問と電話連絡を行う。保護者に協力してもらうよう働きかけ、Ｂ男にも言葉をかける。→学校への不信感が和らぐ。 →休み時間や放課後に、自転車に乗って学校へ来る。
○再登校　７月 ２学期	・２週間ぶりに、ザリガニを持って(自らきっかけを作って)朝から登校した。 ・校舎徘徊、無断下校、いたずらが増加し、男子児童の中心的存在になる。 ・学級全体としてもトラブルが多発する。
10月	・児童相談所と連携する。→「ＡＤＨＤを含むＬＤの疑いがある」との所見を得て、援助・指導の校内体制を再検討する。
○組織的な取組の開始	・箱庭[※3]で遊ぶ。（スクールカウンセラーとの連携） ・ロールプレイング[※4]を含むプレイセラピー[※5]を実施する。(通級指導担当者との連携) Ｂ男がトランポリンなどで体を揺らすことが好きなことに着目し、トランポリン遊びをする中で、ロールプレイングを行う。 〔Ｂ男（正義の味方）が、大型ボール（悪人）を相手に、トランポリン上でタイミングよく蹴ったり体当たりしたりして遊ぶ。教師が、両者の状況を言語化することで、相手の状況を推し量り、行動を自己コントロールさせる。〕 →自分を見つめる機会になる。「学級の人を、もう蹴らないよ」
○２回目の不登校 ４年　11月	・担任からの注意に反抗していた時、今まで行動を共にしていた友達から強く注意された。→大きなショックを受ける。直後に上履きを持って帰宅する。以後、欠席が続いている。
○組織的な取組の進展	・保護者やＢ男との意志疎通を継続するため、家庭訪問・電話連絡・連絡帳等のやり取りを、学校体制として組織的に分担して行う。また、定期的な保護者面談を継続する。→学校への信頼感が少しずつ形成される。 →欠席期間中、放課後に学校へ来た。 →保護者の協力もあり、その支えで図工展の作品を完成させ出品できた。

変化と課題

１　変化

対人関係　行動を共にしていた友だちから注意を受けて、何でも思い通りにしていたことを振り返ることや、ロールプレイングによって相手の気持ちを考えることができた。また、孤立することが多かったが、集団の中に入る場面が増えてきた。

家庭　保護者の思いを受け止めながら連携を図り、Ｂ男の援助・指導について共通理解が進んだ。

２　課題

○　行動を共にしていた児童が、Ｂ男の欠席中は安定することなど、雰囲気が変化した学級や学校に、彼が心の居場所や存在感をもてる場を残す工夫をする。

○　学習困難の改善と克服のための個別指導を専門機関と連携しながら進める。

考　察

ＡＤＨＤを含むＬＤという共通認識を基盤にした組織的な取組により、トラブルの処理に追われる指導ではなく、児童が興味・関心をもつものを糸口として、自己存在感や社会性の育ちを大切にする援助・指導で、改善が見られた事例である。

なお、周囲の変化に敏感な反応を示すＢ男の社会性の弱さに留意しながら、別室登校等無理のない登校環境に配慮することが必要である。

Ｂ男は今　訪問した教師との会話もでき、相談室への登校を考え始めている。